

「平和の祭典」東京五輪・パラリンピックと 東海大学

山田清志*

[Celebration of Peace] Tokyo Olympics/Paralympics and Tokai University

Kiyoshi YAMADA

コロナ禍で開催が1年延期された『2020東京五輪・パラリンピック』は、当時の菅政権が開催反対の世論が大勢を占める中で「無観客開催」という決断をして開催されました。当時、メディアを舞台に多くの識者が反対の声を上げていましたが、テレビ観戦を通じて日本のみならず世界中の人たちがアスリートの世界最高峰の競技や演技に感動するという結果を残しました。スポーツそれ自体が持つ魅力だけでなく、スポーツが持つメッセージ発信力の強さとコミュニケーション手段としての存在価値を再認識したことは確かです。一方で、今回の『東京2020大会』は、招致活動における透明性の問題から始まり、五輪組織委員会と実務を請け負った広告代理店「電通」などから「汚職事件」「入札談合事件」での逮捕者が多数出るという歴史的汚点を残してしまった大会でもありました。何故、こうした不祥事が起きてしまったのか「五輪精神の原点」に立ち返り徹底した検証の上に今後の改善策を考えていかなければならないことは当然です。

「学園の創立者・松前重義博士は「科学技術の世紀」「戦争の世紀」といわれた20世紀を生き抜き、東海大学を中心に教育研究活動を力強く推進すると同時に、世界平和への思いを強くして、民間の学術文化外交やスポーツ外交などで幅広く具体的な平和活動を実践しておりました」（同窓会報コンパス2022年3月号の松前達郎総長ご挨拶から）。創立者の精神＝実践哲学からも明らかなように、「世界平和の実現に向けてスポーツ分野を通じて貢献すること」は、本学の誇りであり使命であることをこの機会に改めてかみしめたいと思

* 東海大学学長 (Tokai University)

【活動の記録】

います。

コロナパンデミック（世界的大流行）禍の対応に政治が揺さぶられ、社会経済活動が制限された人々の不満がぶつけられた中で開催された『東京2020大会』は、現場のアスリートや指導者たちにとっても忘れることのできない重い宿題を課した大会であったと思います。

JOC・日本オリンピック委員会会長として苦勞された山下泰裕副学長や柔道男子監督として見事な成績に導かれた井上康生体育学部教授をはじめ、選手、ボランティアで参加した本学関係者らの声を「2021年夏、コロナ禍の大会の現場の声」として記録に残すべきである、と考え、4か月後の2022年1月12日にシンポジウム『コロナ禍のスポーツと政治とは!? 感動の記憶を冷静な記録へ』をSPIRIT・学長室共催で開催いたしました（抜粋を掲載）。

「人間の安全保障」を研究理念に掲げる平和戦略国際研究所（SPIRIT）が、歴史と伝統ある本学の体育学部などスポーツ分野と協力して「平和への貢献」に資する研究、人材育成に取り組んでほしいと願っています。

◆平和戦略国際研究所（SPIRIT）主催シンポジウム：2022・01・12◆

「コロナ禍のスポーツと政治とは!？」 ～感動の記憶を冷静な記録へ～



（左から渡辺雅彦医学部附属病院長、井上康生体育学部武道学科教授、末延吉正東海大学平和戦略国際研究所（SPIRIT）所長、丸川珠代参議院議員、山下泰裕東海大学副学長、山田清志東海大学学長）

司会（西田 SPIRIT 次長） 新春シンポジウム「コロナ禍のスポーツと政治とは!？」を始めさせていただきます。まずは本日のシンポジウムにご参加いただくパネリストの紹介です。舞台に向かって左から渡辺雅彦医学部附属病院長、医学特に感染症対策の観点からご議論いただきます。次に、東京五輪柔道男子監督の井上康生体育学部武道学科教授。オリンピック・パラリンピック担当大臣を務められた丸川珠代参議院議員、その隣、日本五輪委員会会長・山下泰裕東海大学副学長です。その隣、山田清志東海大学学長です、一番右がシンポジウムのモデレーターを務める末延吉正東海大学平和戦略国際研究所（SPIRIT）所長、政治経済学部政治学科教授です。

司会 さっそくパネルディスカッションに移ります。末延所長お願いします。

【活動の記録】

末延 今日はクローズドで東海大の学生と教職員のみ対象とした自由なパネルディスカッションとなります。

私は五輪が大好きで、楽しんで見ることができてよかったのですが、あの時の空気は政治とコロナへの批判と一緒に五輪が悪者になってしまいましたし、バッハさんが偉そうに見えてしまい、なぜバッハさんは銀座を歩いているのかも言われていました。今日このシンポジウムにお忙しい皆さんに来ていただいたのは、なぜ感動して、なぜ批判したのかを、新しい年になり冷静な頭になったところで、正確に東海大の記録として残しておきたいという目的があります。先ほど、丸川大臣から「素晴らしいキャンパスです」と褒めていただきました。まずは丸川大臣からお願いします。



丸川 私はずっと狭いキャンパスで過ごしていたので、雄大な富士山を見ながら、ゆったりとした学び舎に来た時に感動しました。こういうところで山下先生が素晴らしい成績を残され、後進を育てながらともに、とても厳しい五輪をやり遂げることができたことはとても素晴らしいことだと思っています。ただ、大会が終わった今、コロナの時期だからこそ、スポーツの与えてくれる勇気、あるいは元気が必要だと堂々と言えると思います。



末延 当時の記者会見や国会の答弁で、大臣は答えにくそうに、サンドバッグのように叩かれていましたが、あのときはどのように感じていましたか？ 本当はもっと言いたい答えがあったのではないのでしょうか。

丸川 できれば参加される選手の皆さんに「これを乗り越えることで、みんなで道を開いていこう」と呼びかけたかったですね。実際、新型コロナウイルスの感染対策本部でパブリックコミュニケーションを担当されていた専門家の先生からも、「どうしてリーダーからの言葉がないんですか？ 『世界に約束しました。こういう大会をやります。だから国民の皆さんは協力してください。その代わり素晴らしい大会をつくっていきましょう』という言葉があるべきだと思うんです」と言われ、私はその通りだと思いました。

末延 ありがとうございます。大臣と並んで当事者という点では、山下会長も相当メデ

ィアに迫られて、答えづらそうに見えていました。当時、どのような苦労があったのか、今思い起こしていかがでしょうか？

山下 大変な逆風の中での大会でしたし、課題も残ってはいますが、大会そのものは成功だと思っています。世界の多くの国の人々が大会の開催を称賛してくれています。ご存知の方もいるかと思いますが、世界でテレビ等で大会を視聴した人は、リオ五輪から140%増、それから世界の65%の人たちが成功だったと言っています。また、59%の人たちが、東京五輪・パラリンピックの開催が、コロナ下での希望の光になったと答えているんですね。非常に大変な大会で課題も残りましたが、後世に必ず評価される大会だったと思っています。なぜ成功と言えるか、一つは徹底したコロナ対策が功を奏したと思っています。海外から来た選手やスタッフの85%がワクチン接種しており、いちばん効果的な方法でした。



また、行動管理とPCR検査、選手は毎日検査を受けており、延べ100万回を超えています。

末延 やはり当時の空気は、何を言っても真意が伝わらないから遠慮しておこうと思っていたのでしょうか？

山下 選手たちはいつも周りから応援され励まされて頑張っているのですが、今回のようなことは初めての経験だったと思います。コロナ禍でいろんな活動が制限される中で、自分が練習を再開していいのか悩んだ選手も多かったですし、大会直前まで「五輪に出たい」とは言えないような状況でした。また、多くのトップアスリートはSNSでの誹謗中傷もあり、いちばん酷かったのは、大会の前に競泳の池江璃花子選手に「出るな」という声がありましたし、活躍した後にいちばん酷かったのは卓球の水谷隼選手。非常に誹謗中傷が多かった。選手たちはこれまでに経験したことのない苦しみの中、大会に臨みました。

末延 いちばん選手たちの近くで指導された井上先生にお聞きしますが、いちばん感動したことと苦労したことを教えてください。

井上 大会については本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。選手たちは柔道をはじめスポーツだけの視点で生きているわけではありませんが、大半は五輪で戦うことを生きが

【活動の記録】

い・やりがいに感じ、すべてを捧げて戦っている選手、関係者の方ばかりだったのではないかと思います。

そういった中で、前大臣や会長、関係者の皆さまのご尽力によって、また参加されたライバルの選手にしてもそうですし、周りで支えてくれたスタッフやコーチなど、勝った・負けただけでなく、あの場を設けていただいたことへの感謝の気持ちが、私の中では大きなものとなっています。五輪の過程においては、計画性を持って計画通りにはいかない、先が見通せない中で、選手や関係者が苦労に苦労を重ねた部分があったと感じています。現場サイドとして自分たちができることは何かと考えると、正直、開催する・しないのコントロールは一切できることではないので、開催することを前提に一日一日を大事に、計画性をもって長期的な目線でプランを立てようとしていました。もちろん選手たち、またチームにおいてもこここというところの全面的にサポートしながら、互いに言い合いながら戦っていた部分もあります。



そんな中でも正直、当初はチームでやれることが本当に限られていました。ではなぜ、ある程度の結果を残せたかという、選手たちがいい意味で自律、この場合は「自分を律する」という意味の自律ですが、自律をして主体的に動いていける集団であったからこそ、あの状況下で乗り越えて、一人ひとりが素晴らしい試合をしてくれたのだと思います。それがあの結果であり、五輪での戦いがすべてでした。先ほどの感謝の気持ちというのは、決して私自身だけでなく、きれいごとでもないのですが、今日もたくさんのスポーツに情熱を注ぐ学生がいると思いますが、あのころは当たり前できていたことがまったくできない状況だったと思います。そういった環境だったからこそ、今置かれている立場をいい意味で認識させてもらい、戦うことによって「自分たちはこういう環境下で戦わせてもらっているんだ」と感じられる瞬間だった。選手たちが試合後のインタビューで自身の勝敗以上に、戦えたことへの感謝の気持ちを述べていたのは、その思いがあったからこそだと思っています。五輪が開催されることで、現場の立場からは感謝の気持ちでいっぱいですが、しかし、大事なのは今回得たものを今後どのようにつなげていくか、その目線が大事だと思います。これで終わりではなく、さまざまな課題も残ったと思いますので、次につなげていけるよう、さらなる努力をしていきたいと思っています。

末延 山下先生からありました選手への誹謗中傷、ネットの声は激しいものが目立ち過激になると言われていますが、選手がすごく気をつけて喋っているなと感じました。実際、選手を指導する中でどうでしたか？ 選手たちは傷つき、気をつけていたのでしょうか。

井上 非常に気を使っていた部分もあったと思います。山下会長の言葉にあったとおり、我々は今スポーツをしていていいのか、五輪を目指していいのかというような、世の中の雰囲気でした。先ほども申し上げたとおり、選手たちは人生を考えたときにスポーツや五輪だけに限定しているわけでないけれど、その時代において、彼らにとって本当に大きな生きがいであり、すべてを捧げて戦っていました。一生懸命努力していることを、世の中が否定しかねない雰囲気でしたから、選手たちは相当苦勞をしていたと思います。これは実際に起こったことですが、エレベーターに乗ってほかのチームの人と話すとき、隣の方に「お前は何でそんなに話しているんだ」と言われるような状況もあり、そういった話を聞くと心を痛めていました。

SNSのダイレクトメッセージやネットニュースでも誹謗中傷が出て、選手たちが心を痛めているという話を聞いていたので、今後対策を練ってってもらいたい。あの時点で何か発言をして叩かれたときに、誰かが守ってくれるルールはなかった。選手たちは五輪が開催されるという前提のもとで、やるべきことをやっていくしかなかったもので、その中で余計な発言をして余計なエネルギーを使うのではなく、自分たちは戦うために一つひとつ積み重ねて準備をしていくという選択肢をとった選手もいたのではないかと思います。それほど選手たちは、苦しみながら歩んでいました。そんな中で、何度も言うように勝敗だけでなく、最終的にあの場で戦っていった選手たちは本当に素晴らしいと思います。

末延 「余計なことはしないで集中したい」というところが、アスリートの本音なんだろうなという気がします。それくらいあの夏の空気は異常だったと思います。政治と絡んで、五輪を利用しているのではという菅政権への不満、その象徴として五輪という形になっていった。政府のコロナ対策分科会の尾身茂会長たちが、政府に対して有観客に反対する意見書を出しました。私は、政府の分科会が責任逃れしているのではと考えてしまったのですが、渡辺先生は医学者の立場から五輪をどのように見ていたのでしょうか？

渡辺 先ほどから心ない誹謗中傷の話が続いていますが、緊急事態宣言が続く中で、日本人がみんな意地悪になっていた気がします。その中で高藤選手の金メダルから始まり、暗いムードを明るくしてくれて、日本人がもとの優しさを取り戻すいい機会になったと感謝しています。また、当時はバブル対策やPCR検査、ワクチン接種など第5波が大きかったので、五輪によって感染者が増えたという印象はまったくありませんでした。尾身先生たちの発言です



【活動の記録】

が、開催に関して不安がなかったといったら嘘になると思います。やはり1月の第3波、医学部付属病院でもクラスターが発生し、阿鼻叫喚とまではいきませんが、医療に対する心配はありました。G7サミットが開かれたコーンウォールでは200倍もの感染者が増えたというニュースもあり、五輪による人の増加や、自粛のタガが外れてしまうのではないかという懸念がありました。しかし、あの段階でかなりワクチン接種が進み、70~80%の高齢者の方がワクチン接種を済ませていたので、不安もありましたが日本人が優しさを取り戻すいい機会になったと感じていました。我々医療者としては、精いっぱい支えたい、医療を推進していきたいという気持ちでした。

末延 あのときの不満は、菅総理に言葉がなく、何を聞いても「安全・安心」を繰り返していたことが反対世論の沸騰につながったと思います。山田学長、ここまでの話をお聞きになっていかがでしょうか？

山田 渡辺院長から話がありましたが、あまり知られていないけれどヨットの選手の医療支援を東海大の先生たちが宿舎に泊まり込んで対応していました。渡辺先生も参加されましたよね？

渡辺 私も参加しました。大磯プリンスホテルに一晩泊まりました。

山田 こういったようにいろんな人が底辺で支え、見えないうところでみんなが苦勞をした中で、結果が出てきたのだと思います。先日放送されていたドラマ「輪舞」で山本五十六が取り上げられていました。真珠湾攻撃を指揮したなどと言われていますが、本当は戦争をしたくなかったわけですよ。本当に言いたいことを言えなかった後悔というのは、あとになってからの方が大きいと思います。東海大の創立者である松前重義博士は、そういったことを勇気をもって言った人です。皆さんは現代文明論などで知っていると思いますが、その時期に戦争すべきではないと声を上げて言った人です。松前博士は技術者であり、官僚でもあった人。現在の総務省である通信省に務め、技官として就職しました。その時、「技術者は技術者としての発言をすべき」という技術者運動をやっていました。コロナ禍で浮き上がってきた、あのときの言えない雰囲気を読み起こすと、我々の大学のDNAは、そういうときにきちんと発言すべきだと思うのです。



みんなが昭和16年あたりは「日米開戦だ」と言っている中で、斎藤隆夫という人は「戦争はすべきではない」と発言して国会議員をクビになります。私たちは今回のことの中で学ぶべき。大学の学長として公式に発言したかと言われると忸怩たる思いがあるのですが、アスリートも自分たちの意見を言える土壌を今回の教訓からつくらないといけないと思いました。

末延 会場の皆さんも聞きたいことがあると思います。ちなみに、今回はヒューマンソサエティーカレッジオフィス、キャンパスサポートオフィス、ワークスタディ奨学生、東海大学新聞の皆さんにご協力いただいています。

学生 貴重なお時間ありがとうございます。丸川先生と山下先生にお聞きしたいのですが、オリンピック憲章だと政治と五輪の距離感が常に歴史として問題になってきたと思うのですが、バッハ会長が五輪開催前に何度か来日する中で、バッハ会長が単独で記者に対して五輪を開催する・しないの発言や、先ほど末延先生もおっしゃいましたが、銀座に出歩くなどの行動に対して、日本側に対して事前にコミュニケーションがあったのかをお聞きしたい。

丸川 今のお話はおそらく、IOC サイドからのコミュニケーションがあったのかどうか、ということですかね？

山下 バッハさんについては私が身近で見ていたと思うのですが、一つ言えることは、2020年の11月に見えたんです。その日に、着かれた日に一緒に食事をしたのですが、その時に言われたことで2つ印象に残っているのが、「ワクチン接種がこの大会を安心安全にする一番のポイント、これをどうやって普及させていくかが問題になる」。もう一つは、「安心安全は大会関係者やアスリートだけでない。東京都民や日本国民を守る意味も込めでの安心安全なんだ」と、来られた日の夜の会食会、限られた人数でしたけど、そこでそういう話をされました。

ただ、大きな問題だったのは、先が見えないから、IOCも組織委員会も内閣府もみんな、世界の製薬会社やWHOとも連携しながら、どうやったら安心安全にできるかを議論していて、そういう情報が私の耳にはいっぱい入ってきましたが、先行きが見えないからそのことをあまりうまく説明できない。国民から見ると何も説明せず安心安全とばかり言っていて、国民の命や安全を全く無視してやみくもに五輪に進んでいると見られた。これは非常にまずかったと思っている。今の規定では五輪を開くのはIOC、その開催国が、

【活動の記録】

開催する都市が日本であり東京である。そういう契約になっている。たぶん身近で見ている方は違うと思います。それから2030年冬季五輪に札幌が立候補しているが、五輪関係の契約は今後大きく見直していかなければならない。細かいかもしれませんが、非常に不平等なところがある。

末延 当時、異常だと思ったのは、五輪をどうするかという権利はIOCで、国や東京都は場所貸しをしているということなんです。当時の菅総理が国会答弁で、決定権はIOCにありますと発言したら、その翌日だったかな？ ここでも逃げる菅総理と新聞に書いてある。事実としてはIOCに決定権がある。北京五輪をアメリカが音頭を取って外交ボイコットをやっていますが、あれは中国政府が前に出すぎたからです。IOCが場所を借りてやるので、山下会長は今度北京に行かれますが、「アスリートを中心に、五輪は何を目指してやるのか」話をしてもらいたい。中国政府は場所貸しですから、あまり前面に出すぎない方がいい。

さっき、山田学長が中まとめの中で創業者松前先生の科学者技術者の話、命令したらやっていたらいいというのではなく、世界観、倫理観を持って自分の意見を語ることに意味がある。アスリートも大いに社会政治的なことも語ってほしいし、それでアスリートをたたくような同調圧力のほうが問題、それを増長させているメディアは私を含めて反省をしなければいけないと思います。

丸川 大坂なおみさんが、黒人差別が問題になったときにすごく発言してくれた。同じ思いを持っている人はすごくうれしかったと思うし、トップのアスリートが発信する力はこんなにごったのかと、世界的に影響を与えた。一方で大坂さん、非常に苦しまれたと思うし、メンタルのバランスも崩されたと、そのことを私たちは目の当たりにしました。スポーツ選手が発信することのリスクをまざまざと見せつけられたのが、大会直前の大坂さんの出来事だったんですね。あれを考えたときに、井上監督がおっしゃったとおり、とても今我々はそれをできる状態にないと、当事者である選手たちは思ったと思う。支える側として、十分にサポートができる状態にあったらどうか。そもそもスポーツは社会とかわり、発信する力を持っているというのならば、それをやろうとする選手を支える仕組みがどのくらいちゃんと準備されていたのか、私たちにとって反省であると思います。

山下 なかなか日本でアスリートが発信できない。我々スポーツ界全体に責任があると思う。まだまだ縦社会が強い。我々が選手のころは、余計なことを考えずに好きな練習に打ち込んでいけばいいんだと、こんな雰囲気でした。かなり変わってきたけれど、まだ

まだ、発信しにくい雰囲気があります。そういったのを変えていくのがJOC会長としては私の責任が大きいと思っています。

井上 先ほど丸川大臣からもあった通り、大坂さんや内村くん、素晴らしいコメントを出す。しかしコロナ禍でいろいろな考え方がある中で、特にあのコロナ禍の世の中が荒れた時期に賛否の考え方はあって当然だと受け止めています。これから先、私自身も含めて、そういう発言をしていける環境づくり、それが守られる環境づくりがもっともっと広まってほしいと感じています。

また、我々アスリートというか、我々が今後も意識していかなければいけないのは、そういう発言に対する、チャレンジする心はもちろんですが、それに沿った教養というか、そういう力を身に付けていく、そのために社会や現状を知っておかなければいけない、いろいろなことを学ばなくてはならないというところに結びついていく。アスリートは競技力を伸ばすこと、人間力という広い言い方になるかもしれませんが、そういうことも伸ばしていくことが我々にとってすごく重要なことなんじゃないかなと、そうやっていい形が作られるといいと思いました。そういうためにも、先ほど山下会長から話があった通り、選手たちがそういう場が、学んでいける環境づくりをいかにしていけるかが今後の課題だと思うので、そういうところにもしっかりと力を注いで頑張っていきたい。

末延 もう1つのテーマである、コロナも3年目に入っていくのですが、各大学や高校で合宿していますから、運動部でもクラスターが発生するなど苦労が続いている。大学や高校における部活動、運動部を中心とした部活の問題とコロナ対策をどう考えていくのか。せっかく渡辺先生がおいでですから、大学におけるコロナ対策とスポーツの問題を中心にコロナの感染状況の対策も含めてお願いします。

渡辺 オミクロンが増えています。ただオミクロン株自体は報道でもありますが、感染力は強いが重症度は低いと言われています。今までのデルタ株に比べると潜伏期間は半分くらい。普通の方、ワクチンを打っていれば3日ほどで熱が下がって通常に戻ると言われていますが、しっかりとワクチン接種をしていただくこと。今までも東海大の運動部で小さなクラスターが発生しています。合宿所で食事の際、私たちが職員に言いますが、マスクを外して話しながら話したり、食事したり、これが一番まずい。それをやってしまって観戦して濃厚接触者になると、皆さんが今まで練習してきた成果、末延先生がおっしゃったように発揮できなくなる、そういうことも起こりますので、合宿所内での食事にも十分気を付けてほしい。指導者の先生方には定期的に合宿所の中をチェックしてもらい、何かあ

【活動の記録】

れば医学部にも感染対策室がありますから、相談してもらえればあるていどのアドバイスができると思います。予防して成果をしっかりと発揮してもらいたいと思います。

末延 渡辺先生の話聞いて会場からいかがですか？

学生 昨年は無観客での開催が多かったけれど、今年は有観客と無観客とそれぞれたくさんありました。有観客でやれるのであれば私たちがやりたいというのが本音。有観客での試合開催について、個人的には無観客で行うなら、開催してはいけないのにしているのかなという気持ちもあるので、有観客で大会を行うことの是非、選手の気持ちだけをくみ取ることでもできないので、組織の意見もあると思うのですが。

山下 有観客でやりたいですね。よくわかります。できれば有観客でやりたいけれど、それよりはるかに優先するのが、何としても選手に試合のチャンスをあげたい。有観客については、医師の判断も聞く中で競技団体によって対応が異なる。国内、国外、室内によって変わってくると思いますが、なかなか難しい。私としてはどういう形であっても、選手たちに試合の場を与える、試合をやっていただく、チャンスを確保することを最優先する、それが大事なのかなと思っています。

井上 山下会長がおっしゃったとおり、環境面を整えるのが非常に難しい問題もあるかと、正直思っています。開催にあたって観客を入れる前提でどれだけいろいろなことを考えていけるかが重要な視点ではないか。はじめから無観客ではなく、どうしたら観客を入れてやっていけるかという視点で動いていくことが重要だと感じています。

コロナ対策のコスト面は結構かかる。この問題も今間違いないと起こっていると思います。それも含めたうえで、頑張っている選手たちの姿を多くの人に応援してもらえる環境を一日も早く取り戻す努力を我々もしていかなければいけない。

山下 最後に一つお話ししたいのが、今回の東京2020、皆さんご存じのようにオリパラ一体で取り組んできたが、世界を回るとこれまで日本の社会、日本のスポーツ、あるいは日本のマスコミは障害者スポーツ、パラリンピックにすごく冷たかった。世界に比べれば。それが今回、自国開催を経て大きく変わろうとしている。20年、30年やってもできなかったことが、東京2020の自国開催で、パラでいろんなことを見た、学んだ人がたくさんいる。東京2020がきっかけとなって日本人の障害者スポーツへの考え方が変わったと信じたい。なぜ信じたいか、また元に戻ってしまうかもしれない。2年、3年、4年したら。ス

ポンサー企業も行政も含めて、皆さんが本気かどうか、終わって2年、3年したらわかります。東海大は今、SDGsに力強く一歩踏み出しています。本学でもさまざま多様性を、違いを認め、互いを尊敬しあい、多様性と調和、お互いが支えあう東海大学になってほしいと思います。